



天の川へと赤松の丸木舟
鳥見れば鳥の見てをり草いきれ
熔岩のごとく倭武多の迫り来る
宵山へまだ太陽の衰へず
炎天や影なき木偶坊ひとつ
旱天や樅は根張を見せぬ木よ
岳の花犬呼ぶやうに吾を呼ぶな
草の花犬呼ぶやうに吾を呼ぶな
橿頭の洞うようよと蟬の魂
魂の在り処思へば蔵に黴
草灼くる陶匠坐禅くむごとし
地下水を汲みあぐるごと生きて夏
ソーダ水どう逝くかなど知ったこと
絵金まつり絵から飛び出る美少年

唐澤南海子
満田光生
佐藤健
栗原利代子
海野恵子
渡辺真帆
坂田寿美
菅原砂登子
齊藤すみれ
松本よし乃
丸山公子
中岡草人
高橋佳世子
新野加代
青山篤司

*

ごきぶりの生きるに宙を飛ぶ本気
サロベツや稲妻死語となる原野
石の戸や不意に起き坐す赤ん坊
三陸の盛り土にはやも草いきれ
壘詰にしたきこの風山晩夏
シベリアの話を聞いている金魚
野馬追や父に炎のごとき情
赤松林ひぐらしの声水ふふむ
子を売りし日を月光の鞆しゆく
癌の友ああ万緑よ今燃えよ
施無畏印親子で真似る奈良の秋
秋暁の渦を拝して立つ遍路
仏壇は永遠の積木や盆支度
八月大名コップに呷る生の地酒
押し切りに噛まれ残暑の止りたり

真弓ぼたん
北見弟花
野口美智子
中村陽子
竹村逸子
依田ひろ
高橋洋子
久保美智子
柏田浪雅
池田康樹
増田義幸
松浦礼子
岩井かりん
甲田和利
市川ふじ子

はじめに。九月一日～二日、京都三木半での研修会は〈抒情の変革〉をテーマに五つのパートに分かれ、みよりの多い討論が行われた。本誌十一月号でもその経過が報告されよう。新たな試み、若手俳人育成と同時に、はじめて「岳」に入会される方への投句欄「青雲集」の開設など、百歳人生へ向けての積極的な企画も進行中である。俳句表現を日本文化の核と位置付け、みんなが俳句を通し、心のふるさと探しを行う。そんな試みを進めていきたい。会員同人のいろいろのご意見をきかせてほしい。

赤松の丸木舟——この素朴さ

天の川へと赤松の丸木舟 唐澤南海子

七夕の牽牛——織女の星合を意識したものか。それにしては簡素。赤松で制作した丸木舟で天の川まで漕ぎ着けるのか心配。観世音菩薩が住む地を求め熊野灘へ乗り出す補陀落渡海の舟ほど立派でなくとも、もう少し格好がつけばと想像するが、掲句は赤松林を改めて見直した作として惹かれる。

鳥見れば鳥の見てをり草いきれ 満田 光生

亜高山帯に分布する樅の木は、山の木のように走り根を見せていない。根は地下に隠されている。木の品格を問うならば、そこに王者の風格がある。珍しいところへの着眼に感心した。

岳の幟とふ字に思ひ馳せ 坂田 寿美

霏は「おがみ」とも読み、龍神の意。水を司る神。水神だ。山中や水中に棲むという。「岳の幟」は信州小県地域の雨乞祭。地元の夫神岳（二二五〇メートル）山頂に祀る九頭竜神へ雨乞を祈願し、布をまといつけた数十本の幟を立てる。自発的な風習なのか、大陸の中国文化の影響があるもの

今月の秀句

熔岩のごとく倭武多の迫り来る 佐藤 健

東北青森や弘前、津軽を中心とする旧七夕行事。ねぶり（睡魔）流し（除け）の意とも。現在は八月三日～七日に実施される。「倭武多」の字もごついが、作られる張りぼて人形の極彩色に塗り上げられた豪快さは「熔岩のごとく」の形容がぴったり。日本の歴史に渦巻く怨念を人形に仮託して、これみよがしに表現した感じ。東北のねぶた、四国土佐の絵金、沖縄の盆綱引きなど、日本の地貌のすごさである。

夏の草いきれの中で、はあはあ暑さに喘いでいる鳥。鳥も人間もこの暑さではやりきれない。互いに貌を見合わせるのみ。鳥とところが通う。アニミズム（有霊観）などと面倒なことをいわないところが光生らしいやさしさ。次代の「岳」を背負う一人に違いない。いまは息を整えているさなか。

宵山へまだ太陽の衰へず 栗原利代子

京都の祇園祭の宵宮。現在、七月十七日が本祭ならば前夜十六日が宵山。いまだ日が高い。もう準備がはじまっている。「太陽」といったことで一句はメリハリがつく。抒情が新しい。京都のみでなく、世界の祇園宵山の感じ。

炎天や影なき木偶坊ひとつ 海野 恵子

木で彫った円空仏のような人形が木偶。真上から照り付ける炎天下に影をもたない木偶人形が立っている。無言だ。人形を描きながら人間にまで想像が及ぶ。当然、自分も含めて。そこに批評性が生まれ、人間の生存のきびしさが問われる一句になろう。単純でしかも深い。

早天や樅は根張を見せぬ木よ 渡辺 真帆

か。「岳の幟」の例句は少ないので、好句を得た。

草の花犬呼ぶやうに吾を呼ぶな 菅原砂登子

迫力がある。飼犬を呼ぶかのように気軽に適当に自分を呼ぶな。野外でのことか。草の花から秋の野遊びの情景を思った。亭主の勝手への女房の反撃といえは大げさであるが、こんな呟きの一句にもどこかみちのくの風土を連想する。

檐の洞うようと蟬の魂 斉藤すみれ

南国の海浜に多い檐の太木。その古木の洞に空蟬があるのか、蟬の魂がとり付いている感じ。蟬の魂の落ち付く場が檐の洞だというのがささやかな発見だ。檐のなめらかな木肌にやすらぐ蟬の魂とは、梅雨湿りの感触も伝わる。

樅頭の七夕竹と出漁す 松本よし乃

帆柱の先が樅頭。そこに七夕竹を結わえ出漁した。七夕の漁。一日の漁なのか、折から七夕という設定も巧み。七夕行事が暮しの中に根付いているさまがわかる。

魂の在り処思へば蔵に徹 丸山 公子

亡き人の魂の居るのは蔵。それも徹ばかりの処。蔵には食物もあり、いかにも身近で、魂の落ち付く場所でもあろう。徹を出したことで魂がぐっと庶民的になったのがよい。

郭公のなにも触れざる声透る 平成六年

「鷹」(平成六年九月号)所載。「浅間高原」と前書。星野温泉での「岳」十六周年大会に一七四名参加。星野の朝、近くで郭公の透明な声を聞いた。大会の後、群馬の鎌原村でも郭公を聞いた。地貌の声だ。『山の牧』所収。

滴りの金剛力に狂ひなし 平成六年

「鷹」(十一月号)所載。原句「金剛力を信じたる」を推敲。八月十日、長野県林業大学の夏季エクスカージョンで南佐久郡川上村の千曲川源流を探索した。五メートル四方くらいの泉がある。大巖からの滴りの的確さに見とれた。甲武信岳(二四七五メートル)に登攀した。金峰山荘に泊ったのも懐かしい。鷹羽狩行に称賛された記憶がある。歳時記などによく引用される。『山の牧』所収。

弟切草歩けば思ひやさしかり 平成六年

「鷹」(十二月号)所載。動くことでは固着しない、柔軟になると気付き、傍らの黄色い花に目を留めた。弟

切草だ。茎葉を絞った汁が鷹の傷を治す。そんな鷹匠の秘密を漏らした弟を兄が殺したという哀切な話が草の名の由来。地味な秋草に魅かれる。『山の牧』所収。

蓴麻に秋の早しよ目籠編み 平成六年

「鷹」(十一月号)所載。「戸隠」と前書。蓴麻は湿地にやたら繁茂する。鋸歯があり、葉には毒がある。葉の汁は蛇に咬まれたときの毒消し、痛み止め。茎からは繊維が穫れ、古代人の衣装となった。戸隠は山仕事が盛んな地で、竹で目籠を編んでいる。質素でつましい山暮らしのさまが目に見えるようだ。『山の牧』所収。

露の玉抱き耕山老師像 平成六年

「岳」(平成六年十一月号)所載。「笹村草家人展をみて、わが若き日の参禅の師加藤耕山に見ゆ」と長い前書。穂高の碌山美術館での草家人作の彫像展示を見て驚いた。私が二十七歳、小諸高校在職中の昭和三十九年八月六、八日、佐久の中込正安寺へ、校長中村博二のお供をして夏季参禅会に参加。その時の禅家に加藤耕山師。九十歳は優に越え、小柄な優しい老師であった。手元に一葉の写真があり、初体験での強烈な印象がある。『山の牧』所収。

草灼くる陶匠坐禅くむことし 中岡 草人

陶匠の一つことに執する態度を「坐禅くむ」ようだとは巧みな捉え方だ。我慢に我慢。修業は即ち修行なのだ。視線が草灼くという地平なのが、作者草人さんの地に根をおろした生き方そのもの。どの一点をとらえても完璧にして深い。作品が人生訓ともなっている。最高の一句。俳句はモラルを追求するものではないとの俗言などよせつけない迫力がある。

地下水を汲みあぐること生きて夏 高橋佳世子

暑い夏。井戸から貴重な地下水を汲み上げる。苦勞な仕事である。精一杯生きる実感が伝わる。体を張って比喩を用いている。思慮深さもある。大げさといえは大げさであるが、一日一日を大事にしている思いから用いたもの。

ソーダ水どう逝くかなど知ったこと 新野 加代

終末期のあり方、いかに死を受容するか、はやりのように、テレビ、新聞、雑誌は毎日そんな記事で埋められている。いま生きるのに精一杯の世代からみると「どう逝くかなど知ったこと」か。一度こない方になりたいという気持ちがわかる。これが世の中。ああいえばこういいたいひととはどうぞ。そんな一句。

絵金まつり絵から飛び出る美少年 青山 篤司

珍しい地貌季語、土佐高知の「絵金まつり」詠。香南市赤岡町の須留田八幡の祭礼は七月第三土曜、日曜。土佐の芝居絵師広瀬金蔵(絵金と呼ぶ)の「血みどろの芝居絵」が並ぶ。残酷でエロチック。生首がはっとび出せば、美少年くらいは屁のかっぱ。おどろおどろしいこと最高の真夏の夜。

他に同人集からの推薦候補作を掲げる。

赤松の語り出だせり晩夏光	佐藤 映二
人間の貌に似る熔岩風は秋	田中 純子
猛暑幾日石の野性のやせてゆく	森 玲子
乞巧奠飾りや京の雨激し	小伊藤美保子
下闇に覗く考の眼ルドンの眸	渡辺 秀雄

サロベツ原野詠、稲妻が死語とは

サロベツや稲妻死語となる原野 北見 弟花

稲妻は一望の稲田の結実をうながす「稲の夫」。いなるつるび。ところは北北海道のサロベツ原野。いくら稲妻がもたらされても稲田がなければ哀れこの上ない。稲妻が死語とはなんとかなしい。大景を捉えた地貌の一句として心にとどめた。過日、旭川の俳句大会の折、弟花さんと出会った。八十八歳。もっと早くから出会いたかったが、出会いは運。こんな立派な大きな句をものする作者に心から敬意を表したい。

石の戸や不意に起き坐す赤ん坊 野口美智子

石の戸は旧七月一日（新暦では八月一日）「釜蓋朔日」。盆近くなり地獄の釜の蓋（石の戸）が開き亡霊が地獄から解放される日という。この日を「石の戸」と呼ぶ鄙の地がある。偶然であろうが、不意に赤子のお坐りができるようになった。これも大きく仏の加護（お助け）か。地貌季語との取り合わせに意外性がありながら、不思議さが伝わる。

三陸の盛り土にはやも草いきれ 中村 陽子

復興のシンボル、三陸の盛り土に忽ち夏草が茂り、草いきれが立つ。自然の災害を自然が繕うことの早さにおどろく。自然は人力などものもしない大いさを持っている。

堰詰にしたきこの風山晩夏 竹村 逸子

草の次は風。八ヶ岳の晩夏の風の厚み。堰詰にして世に出したい。こんな機知が俳諧の特色。軽い思い付きもまたよし。

シベリアの話を聞いている金魚 依田 ひろ

水槽の金魚がシベリア抑留譚を聞いている。悲惨な戦争咄と平和のシンボル金魚との合体。どこか現代的なセンス。

野馬追や父に炎のごとき情 高橋 洋子

秋暁の渦を拝して立つ遍路 松浦 礼子

最期の一句。赤尾兜子門であった作者が私に付きたいと長年の願いを実現。短い期間であったが、秋遍路の鳴門渦潮詠を遺してこの夏逝去。八十七歳。ご遺族から最後まで句作に生きた追慕の様子をうかがう。ご冥福を祈る。奈良の作者。

仏壇は永遠の積木や盆支度 岩井かりん

知情のバランスを忘れていない。が、仏壇への覚めた即物的な見方にはっとする。毎年塔婆やお札を積み重ねるのみ。

今月の秀句

ごきぶりの生きるに宙を飛ぶ本気 真弓ぼたん

ごきぶりの生きるに宙を飛ぶ本気。生きるに必死。追われると油じみた翅でわずかに宙を飛ぶ。人間にとっては伝染病媒介の天敵。しかし、一茶ではないが、嫌われものでもいのちあって同時代の空気を吸っている仲間。すべてが人間中心とはいかないはず。美しいものが俳句に詠まれる対象であった時代から、今やどんな小動物でも生きるという一点では同視同仁の時代。熊本地震に家屋がゆがんでも俳句の集まりにかけつけた熱意溢れる作者。考え方がぴんと張っている。

野の放牧馬を柵に追い込む祭、相馬野馬追は夏の七月二十三日から三日間行われる祭事。野馬追に寄せる父の篤い情を思うと、作者にとっては父への情もまた厚いというもの。

赤松林ひぐらしの声水ふふむ 久保美智子

巧みにすでに詠われている類想感がある。が、赤松林という偶然の囁目を生かした上七音の何気なき、無造作が、以下の巧みを均している点がよい。巧さを消す置き方である。

子を売りし日を月光の轆しゆく 柏田 浪雅

満州からの引揚げの悲惨極まる折、子を中国現地に売り、いのちを托して帰国。こんな残酷な真実を知っていると、生涯、一刻も忘れ得ない。本当は月光くらいでは癒されることがない。仮に月光にすがったいい方ではないか

癌の友ああ万緑よ今燃えよ 池田 康樹

心に深く思うことと万緑を讃えることとのちぐはぐさ。みどり深いことは残酷。癌の友を思えば万緑などいっぺんに枯れてしまえ、くらいに思う。が、思い返して逆接のいい方になってしまった。気持の動転から立ち直った実感が伝わる。

施無畏印親子で真似る奈良の秋 増田 義幸

仏が衆生に徳を与える印。掌を外に向ける穏やかな印相。秋の奈良で仏像を見て廻る父子のほくえましさ。佳日寸景。

そこは、たましいの住み家ではないのではないかという。

八月大名コップに呷る生の地酒 甲田 和利

八月は農作業が暇、大名気分という。とはいえ、コップに生の地酒をそそぎ呷るとは、どうも八月ばかりではないのではないか。八月は安心して吞める。酒呑みの口実がおかしい。

押し切りに噛まれ残暑の止りたり 市川ふじ子

藁などを押し切る作業用の裁断機に半ば預けたまゝ、こゝに来て急に残暑が消えてしまった。なんだか中途半端な気分。技巧的な作。

他に岳集推薦候補作を掲げる。

この星もやがて赤色晩夏光	石川 定雄
銀漢やわが山旅のなお遠き	田中 利政
若き日や飛魚に曳かれて荒海を	加瀬ひろし
鬼灯の漬れ少女期了りけり	広枝千鶴子
失恋の顔をしてゐる胡瓜かな	降旗 康
鉢巻で老々介護遠花火	黒坂 愛子
陶枕に描かれし唐はるかなり	滝川 陽子
沢蟹がベッドに上る驟雨の夜	上村 敦子
投石につきまとひをる夕蝙蝠	小林 亘
姥百合は夕べの森のパレリーナ	中川 由美